

# 老舍研究会会報 第16号

胡絮青女士 題字

## 上海で甦った老捨

— 大型歴史話劇『正紅旗下』

上演パンフレット雑感 —

倉橋 幸彦

もうずいぶん前のことである。

老舎の遺作とも言える『正紅旗下』がお芝居になる、いや映画化されるであったかもしれない。そんな噂を耳にしたことがある。おそらくそれは、舒乙さんか舒濟さんの口を通してであったろう。

しかし、その後、この改編計画の進展具合については知るよしもなく、いつしか筆者の記憶からもそのことは消え去ろうとしていた。

ところが、ちょうど今世紀の門出を上海で迎えられた杉本達夫先生から、意外な新聞をお教えいただき、この記憶が甦ったのである。

話劇『正紅旗下』が、しかも上海で上演されたというのである。

杉本先生が、しかも一滴の御神酒も入らない状態で法螺を吹かれるわけなどないのであるが、先生は疑い深い筆者のことを察して、さっそくこの話劇の上演パンフレットを筆者にお貸し下さった。

上演場所は、上海話劇芸術中心（安福路 288 号）。

脚本は、物議を醸したあの話劇「有這樣一個小院」や「小井胡同」の作者、北京人芸の李龍雲。舞台美術も北京中央戯劇学院の黄海威、「民俗顧問」には北京の古い風俗に詳しい漫画家李濱声と、誠に老舎『正紅旗下』の改編に相応しいスタッフとあってよい。ただし、演出には成都から査麗芳を招き、なによりも俳優の顔ぶれが、全員上海を中心に活躍する面々なのである。はたして、彼らが舞台でどのようにそれぞれの役を演じ、また観客がそれにどのように反応したのであろうか。

杉本先生によれば、「百年も前の、しかも遠い北京の物語だが、上海の観客は敏感に反応し、長い拍手でこたえた」（『朝日新聞』2001. 1. 19、本誌『老舎関係文献略目(5)』参照）そうである。筆者の読みは、見事に裏切られた。

李龍雲によれば、実はこの改編創作は于是之の薦めもあって1985年から着手。しかし、途中数度の頓挫と挫折を繰り返し、1999年老舎生誕百周年に花を添える形で、ようやく完成したということである。しかし、上演パンフレットでは、この「老舎生誕百周年」については全く触れられず、「庚子事変百周年」（2000年）記念を前面に打ち出し、「振興中華 勿忘國耻」の八文字が大文字で印刷されている。上海における話劇『正紅旗下』は、老舎原作の改編劇というよりも、むしろ「大型歴史話劇」として舞台に掛けられたのである。上海上演の戦略と、その成功の一端を見て取ることができるのではな

いか。

さて、最後に蛇足を一席。この上演パンフレットの表記は、昨今の流行であろうか「繁体字」を主としているが、写真入りの主演紹介の個所では「老舍」とあるが、その他の個所では、すべて堂々と「老捨」と表記されている。もつとも、北京ですら「Lǎo Shè」と発音される方もいるし、また作家の名前を当てるのに、「古い校舎」と題した「謎語」をどこかで読んだ記憶もあるわけで、この「老捨」という表記いささか違和感があるものの、音という点また含意という点からすれば、なかなか「捨」てがたいものといえよう。

かくして、「Lǎo Shè」は上海で甦ったのである。

[補記] 話劇『正紅旗下』の脚本は、老舍原作の小説を附して『正紅旗下』（民族出版社、2000年11月）として公刊されている。この脚本の内容紹介については、紙数の関係上、次号に委ねることにする。

## 老舍『月牙兒』随想

— 「食べられる」ことを巡って —

高屋 亜希

月を眺めることが過去を回想する契機となり、そして回想を終えた主人公が再び月を眺める、という『月牙兒』の構成は、どこか魯迅の『狂人日記』を想起させるのではないだろうか。「今夜はとてもいい月だ」という有名な一語と共に、月を見なかった三十数年間は意識を研ぎ澄ますことなく、ぼんやりと過ごしてしまったようだ狂人は語り始めるが、『狂人日記』に於いて月は、明らかに覚醒の象徴として描かれ

ている。闇を皓々と照らす月明かりを頼りに、覚醒した狂人が見たものは、人々が暗闇に紛れて自分を「食べ」ようと虎視眈々と狙っている、という恐怖の現実であったのは、周知のことであろう。

『月牙兒』に於いても、「食べられる」ことへの恐怖は、繰り返し語られている。美しい大人の女へと成長していく主人公に対して、「お前は売らないのかい？」と、周囲の男たちは性的な欲望を容赦なく向ける。自分の肉体が男たちに及ぼす力を感じる一方で、肉体を男たちに差し出し「食べられる」ことへ、漠たる恐怖を覚える主人公。その恐怖は、性を体験した後も一向に減らない。男たちは甘い言葉でその恐怖を一時的に忘れさせることはあっても、暴力的な力を振るって女の肉体を「食べる」ことになり、その上やがて女に飽きると、甘い言葉で取り繕うこともせず、ただ暴力だけが女の肉体に振るわれるようになる、と主人公は語る。

『月牙兒』にあつて興味深いのは、社会の最底辺に生き、売春を生業とすることを強いられた主人公のみならず、全ての女たちは貧富に関わりなく、その肉体を男たちに「食べられる」ことでしか、自らの力で稼いで生きていくことができないという現実を、主人公に見出させたところにあるだろう。売春婦や妾になることへの嫌悪感を示し、恋愛を夢見る良家の女たちにしても、夫という名の男にその身を「食べられる」ことで糧を得ているに過ぎない、と主人公は醒めた眼差しを向けている。たとえ二人の馴初めが恋愛であったとしても、「食べられる」という現実が変わりなく、恋愛というロマンティックな物語で、その現実から目を背けているだけのことだ。恋愛による結びつきに幻想を抱く女たちの盲目ぶりに対して、主人公は侮蔑を漏らす。

当然、主人公が他の女たちに向けるこの侮蔑の裏には、糧を稼ぐには恐怖に耐えて、己の肉

体を「食べられる」しか方法がない、という全ての女たちが強いられている現実を、自分だけは直視し続けている、といった強い自負が潜んでいるだろう。売春という、素性も分からない不特定多数の男たちに「食べられる」ことで糧を手に入れる、という生き方はむしろ強いられるものであり、悲惨なことかもしれない。しかし、女が生きていく現実を直視することで、主人公はその唯一示された生き方を自ら主体的に引き受けている、という事実を見逃してはなるまい。「食べられる」という職のプロになると決意した主人公は、売り手として買い手である男たちと同じ土俵に立って駆け引きをし、その意味で男たちと対等であろうとしているのだ。ともすれば暗闇にのみこまれてしまう『月牙児』の微かな月明かりが、主人公のために照らし出しているのは、まさにこの女たちに残された唯一の生きる術なのである。

事実、『月牙児』に於ける月は、主人公が女一人で生きていく方法を模索する時にこそ、その臍気な姿を現している。例えば主人公の母親が、親子二人生きていくために再婚するが、義父のもとで生活に心配がない時は月を見た記憶がない、と主人公は語っている。また男たちに「食べられる」という生き方ではない、別の方法で生きていけないかと懸命に思案するものの、何一つ手だてが見つからないでいる時には、何だか怖くてずっと月を見なかった、とも語っている。主人公がそこから必死に逃げようとしながら、実はもともとただ一つしか選択肢が用意されていない、「食べられる」という生き方。その恐怖の現実を直視することと、月を眺めてその存在を強く意識することには、明らかに関連があると言えよう。

「食べられる」ことでしか生きていけない現実を見つめ、且つその現実を自ら引き受けることで、誰にも寄りかからず自分一人の力で生き、と矜持を保ち続けた主人公。『狂人日

記』と同様、『月牙児』の月に覚醒の象徴を読むとするならば、主人公のその誇り高い醒めた意識にこそ、読み手は共感を寄せなければならぬのである。

## 「青島与我」二則

平松 圭子

### 一 “浴衣”

1935、36年頃の老舎の短編小説やエッセイには、彼が青島に住んでいたこともあって、青島について語り、あるいは青島を背景にした作品が幾編もある。

エッセイ「青島与我」（1935年）もその一つで、老舎自身の青島での最初の夏の過ごし方について一寸自虐的とも思えるような皮肉な筆使いで描かれている。夏の避暑地として、特に美しい海濱都市青島は快適な保養所として有名である。「青島与我」の冒頭の段落で述べられているのも青島の海濱風景であり、老舎自身の姿が描かれている。

その冒頭の一節は次のような文章である。

大概您总可以想像得到：一个比长虫——就是蛇呀——还瘦的人儿，穿上上不着天，下不着地的浴衣，脖子上套着太平圈，浑身上下骨胳分明，端立海岸之上，这是故意的气人？即使大家不动气，咱也不敢往水里跳呀：脖子上套着皮圈，而只在沙土上“憧憬，泄气本无不可可也不能泄得出奇。咱只能穿着夏布大衫，远远的瞧着，偶尔遇上个异数卫道的人，相对微笑点头，叹风化立不良，其实他也跟我一样不敢下水。

この引用文の「胸元のあいた、脛をむき出しに、“浴衣”を着て、浮き輪を首にかけた痩せ

た男の人」、という“浴衣”について、私はアメリカ映画で見かける海水パンツに上半身は丈の短いバスローブを襟元をぬいてはおった姿を想像した。

短編小説「丁」は青島の夏の海が場面である。

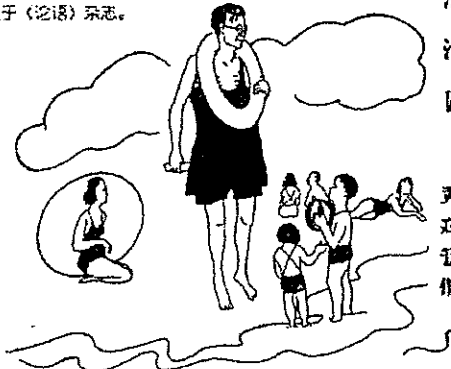
背上太潮的。新的浴衣贴在身上，懒得起来，还是得起，海空气会立刻把背上吹干。

ここでは「“浴衣”がしめってからだに貼りつく」とあり、“浴衣”は海水パンツでないことは明らかだ。

1930年頃の男性の水着姿について何人かの中国人に尋ねてみたがはっきりした解答は得られなかった。

ところで、『老舍：消失了的太平湖』（李輝著、'00年9月大象出版）に「老舍海浴图」と題して、「青島与我」の冒頭に出てくる老舍の姿の漫画が載っている。すでに見た方も多いと思うが、参考までに転載させていただくことにした。

三十年代在青島，老舍俨然已是名流。朋友常來他家中更衣，然後踏入海邊的浴場，老舍豈從不下水，却也成了翻譯家與畫家笔下的漫画人物。该漫画1935年发表于《论语》杂志。



老舍海浴圖

頁  
忠  
昔  
事

ちなみに「丁」の英訳（“Blades of grass : the stories of Lao she”、1999年、ハワイ大学出版）では“swim suit”と訳している。年配のアメリカ人に30年代の水着姿について尋ねたら、袖ぐりも衿ぐりも大きくカットしたアンダーシャツとパンツの連った水着の絵を書いてくれた。上下連っていても分かれていても“suit”というそうだ。

## 二 “异教卫道”か“翼教卫道”か

さきにあげた「青島与我」の一節の中に“异教卫道”の語が見えるが、初出では“翼教卫道”（初出は「避暑録話」8期）に作る。

現在“翼教”としているのは香港版『老舍幽默文集』、『老舍文集』、『老舍全集』、『老舍幽默詩文集』『老舍第二故乡』等所収の「青島与我」はいずれも“异教”になっている。同じ頃発表した「何容何许人也」（1935年8月「人間世」1期原載）に“翼道救世”の語が見える。“助ける”の意味の動詞に書面語“翼”を用いたのには何か意味があるのだろうか。“异教卫道”のほうが正しい、“异教徒”という語があるように「基督教の伝道士」とする人もいる。果たして“翼”か“异”か、私は“翼”が正しいのではないかと思うのだが。

## 胡黎青女史を偲ぶ会に出席する

岡田 祥子

胡黎青女史が2001年5月21日16時27分北京で亡くなった。享年96歳であった。女史は高齢ではあったが、私は北京に行くたび、女史の壮健な姿に接していたので、この突然の訃報は驚きだった。

6月初旬、私は「胡黎青治葬委員会」から一通の郵便物を受け取った。その中に、訃告と書

かれた文書が入っていて、「親族で相談の結果、胡絮青の追悼会は行なわず、後日小規模な追思会を行なう。追思会の日時は追って知らせる」とあった。

逝去からほぼ一ヵ月後、舒乙氏からの手紙で、胡絮青女史の「百日追思会」は8月21日(火)に行なわれることがわかった。私が出欠を決めかねているとき、中山先生から「私一人で行くのは足元が不安なので、同行していただけないかしら」と電話が入った。「私でもお役に立てたら」と、北京に行くことを決めた。

百日追思会は、中国現代文学館の「多目的ホール」で、午前9時過ぎから開催された。日本からの出席者は伊藤敬一、中山時子、武永尚子、倉橋幸彦(他一名)、芝垣輝子(他一名)、植木敦、大辻富実佳等(敬称略)、私を含めて十数名であった。中国側の出席者は、老舎研究関係者は範亦豪氏、甘海嵐女史、劉誠言氏など数名で、会場いっぱいの出席者の大半は、私の全く面識のない人たちだった。

会は出席者全員が起立し、祭壇中央スクリーンの胡絮青女史の遺影に三礼して始まった。遺族代表の献花がすむと、遺影は突如生前の女史のビデオに変わった。出席者はそれぞれの形で、ビデオ画面の女史を見ながら、女史を偲んだ。

ビデオが終わると、女史と縁<sup>ゆかり</sup>のあった人たち、それは画家であったり、元教師であったり、女史と近所付き合いをしていたおじさん、おばさん達であったが、次々祭壇下左端の演台の前に立ち、女史の思い出話をはじめた。話しながらなにかを思い出して嗚咽するひとや、目頭を抑える人たちが何人かいた。話しをした人たちは皆高齢だった。

日本人を代表して演台の前に立たれたのは、伊藤敬一、中山時子先生の二人だった。伊藤先生は流暢な中国語で、中山先生は何故か日本語で話された。中山先生の日本語は、私には幸いだった。今まで知る機会を得なかった胡絮青女

史の人となりの一端を、なんの苦もなく、私は聴き取れ、理解できたからであった。

先生は胡絮青女史との交流を、1980年秋、北京の老舎故居に女史を訪問された初回から、回を重ね、最後となった2001年3月29日、中国文学館での「老舎を読む会」50周年記念祝賀会まで、会見のたびごとの興味深い逸話を交えながら話された。

今ここで、私は伺っていて特に興味深く考えさせられた、先生と女史との2度目と3度目の会見での話を紹介しようと思う。

先生と女史との2度目の出会いは、1981年初秋、『老舎小説全集』が翻訳出版され、それを記念して、学習研究社が舒乙氏と胡絮青女史を日本に招待したときだった。学研の歓迎会には、開高健、水上勉、城山三郎氏など、時の錚錚たる作家が招待されたとか、宴会半ばで、開高健氏かどなたかが、「私は以前に『駱駝祥子』の主人公祥子が最後に性病で、陰茎の先がぐちゃぐちゃに潰れて、形を成さなくなった様子が如実に描かれている版本があると聞いたが、私は未だにそれを見たことがない、その版本の存在は事実なのか」と尋ねると、女史は「老舎はそんな不潔なものは絶対に書きません」と毅然として、突っぱねられたとか。宴席はしばし白けたそうであった。

3度目の出会いは、1986年北京の対外友好協会ホールで行なわれた老舎の座談会の席でのこと、今は亡き北浦藤郎先生が「祥子の洋車を引く描写は、いかにもそれらしく、実際洋車を引いた者にしか書けないと思える巧みさである、老舎は洋車を引いた経験があったのではないか」と質問されると、胡絮青女史は稟として、「老舎はそんな卑しいことは、絶対していません」と強行に否定された。これら二つの質問への女史の回答は、女史が作家としての老舎と、夫としての老舎に対する高い誇りを抱いていればこそその確信ある回答であるといえ

るのかもしれない。しかし私には、女史が老舎を貶めまいと、老舎という大作家の清廉さと高潔さを殊更に印象付けようとする頑なさが感じられるのである。老舎といえば「ユーモア」といわれる、その夫人ならばこそ、「引いていたらもっと上手く書けたでしょうに」と茶目っ気のある対応をして、質問者、臨席者を喜ばせてくれる鷹揚さがあってもよいのではないかと思う。

追思会終了後、ホテルの先生のお部屋で伺った話である、先生は「私は不思議に思っているのだけど、胡絮青女史が声を上げて笑ったのを見たことがないし、彼女の笑顔も一度も見たことがないの、いつもきつと口の両端を結んで、厳しい顔をしていらっしゃる姿しか思い出せないの」と。女史は中国の激動の年月を生きてこられた。そして激動の人生の過程で、夫老舎の非業の死を経験した。彼女は夫の非業の死をどう受け入れ、自分を納得させて生きてこられたのだろうか。端正ではあるが笑顔のない厳しい顔は、私たち日本人にはもとより、中国人同胞にであっても、他人には計り知れない、大きな悲しみや苦悩を心のうちに閉じ込めて、生きてこられたことを物語っているのだろう。そういう意味で、彼女の人生を改めて慮ってみる必要があると考えた追思会であった。

## 張桂興編『《老舎全集》補正』の意義

杉本達夫

山東師範大学教授・張桂興氏の手になる『《老舎全集》補正』(以下『補正』と称する)が出た(中国国際広播出版社、2001年12月)。張氏の「老舎研究叢書」全10点の計画のうち、7番目の仕事である。いわゆる「老張的治学」の

重みについては、すでに昨年の本会報第15号において日下恒夫氏が語っているとおりで、われわれ老舎研究の徒が氏の仕事からどれほどの恩恵を蒙っているかは、いまさら言うまでもない。新たな仕事『補正』を手にして、あらためて瞠目する。

『補正』は上下2編からなり、上編「校読編」は『老舎全集』全19巻(以下『全集』と称する)のうち、第13巻から19巻までの7巻に収録する作品すべてについて、初出テキストと丹念に校合し、その異同を明示する。下編「補遺編」は『拉郎配』を含めて『全集』編集後に発見された作品や、『全集』に漏れた作品を収録するとともに、『全集』に不完全な形で入れられている作品を、完全な形に戻して再録する。

個人全集というのは編集に当たって、全作品の原稿や初出誌紙を突きあわせることが前提であって、膨大な手間と時間を必要とし、底本を決めるにも難しい検討を経るものであろう。その点、『全集』はあまりにも時間と人手が不足し、さらには校正も万全ではなかったらしい。わたしは『全集』に大いに依存しているし、『全集』を手元に置く心強さは何ともいえない。だが、そういう問題が潜んでいるとなると、利用に際してとかく不安がつきまとう。そこへこの『補正』が出て、不安を取り除いてくれたのである。今後は『全集』を開く際、同時に『補正』も開くことが不可欠になる。

全作品について初出テキストを突きあわせることが、そもそも初出誌紙を探すことが、いかに困難な作業であるか。見つけた後も、とくに抗日戦期の誌紙などは、コピーも撮影もできないことが多く、判読困難な印刷も多かるう。そうした資料を張氏は筆写していると聞いた。それがどれほどの量に達するのか、その持続する意志の力に、わたしはただただ敬服する。何らの異同がない場合、校合作業がむだかといえれば、もちろんそうではない。言うまでもなく、

異同のないことはテキストの正確さを保証するのであって、張氏の作業の重要性に変わりはない。1編1編の本来の姿が正確に示されること、それが何より大切なのである。

異同には2通りある。ひとつは編集作業上のミスであり、これには1字2字の誤植から、何百字もの脱落まで含まれる。意図的な削除かと疑われる個所もある。もうひとつは老舎自身による修正である。老舎は本来、発表済みの作品に手を加えることの極めて少ない作家であったが、『補正』によって、建国後の「雑文」に、単行本収録に際して小さな修正を多く施していることが知られる。老舎自身が手を入れたものなら、当然それは定稿となるが、修正がどういう意図に基づくかは、別途に研究すべき事である。陳徒手著『人有病，天知否』（人民文学出版社刊）によれば、老舎はひとつの劇に着手してから定稿を得るまでに、上から下から周囲からの指導や意見や横槍に対して、いちいち誠実に対応し、驚くほどに改稿を重ねているが、それは劇の場合であり、「雑文」には事前の指導や批判は考えにくい。とはいえ政治の季節、事前はもとより、事後にも単なる修辭を越えた配慮が必要であったにちがいない。

張氏の『補正』一書によって、老舎という存在への新たな謎が生まれたり、老舎像の修正をせまられたりするかといえば、それはないとわたしは思う。『全集』に見られる、ひたすら党の指導を信頼し、民衆との結合を説き、働きに働き、胡風や右派分子をはげしく非難した老舎は、本書の中にも同じ顔で存在する。本書の中に老舎の何を見出すかは、ひとえに利用する者の問題である。新たな老舎像への手がかりの有無にかかわらず、『補正』の価値はきわめて高く、張氏の貢献はいよいよ大きい。わたしは本書に感謝する。

## 老鄭実・傅光明『太平湖的記憶 ——老舎的死』（書評）

谷川 毅

—昨年春、たまたま傅光明『老舎的死——採訪実録』（1999年12月、中国広播電視出版社）を手に入れることができた。四十年近くを経てやっと語られた証言の重みとその取材の幅の広さに圧倒され、一気に読み終えた。少しでも多くの人に知らせたいと、その夏の老舎研究会大会の発表の時には、自分のいかげんな発表はほどほどに、この本の紹介に力を入れてしまうほどだった。

インタビューするにあたっての重点項目については、著者が序文で明確にしている。ひとつは「老舎の解放後の創作について」、二つ目は「老舎が解放後の政治運動で果たした役割」、そして三番目が「老舎はいったい、どういう心境で湖に身を投げたか」、である。そして本の構成は大きく「親歴・見聞」「思考・反省」の二部に分かれ、巻末に「老舎筆下的水和死」が参考のため添えられている。

読み始めたときは、八・二三に起こった出来事について語られる部分に興味集中した。あのとき起こった事実がいよいよ明らかになるのだとドキュメンタリーを見ているような気持ちで読み進めた。しかし関係者の証言の食い違いが次々と出てくるのを見て、本人の記憶に頼った証言で事実を明らかにすることの難しさを嫌というほど思い知らされた。誰が本当のことをしゃべっていて、誰が嘘を言っているのか（故意でないにせよ）、読めば読むほど混乱は深まるばかりである。それでもこれまで知ることのできなかつた、老舎が文聯から孔子廟へ連れて行かれ死体で発見されるまでの状況をより詳しく知ることができた。これら証言の食い違いについては現在、杉本達夫先生をはじめ

多くの方々が注目しておられる。

しかし読み進むにつれ、事実がどうであったかということよりも、取材を受けている側が老舎の死をどうとらえているかという点に興味が移っていった。そして読み終わってからしばらくして、老舎の死について語るということは、語る人の文化大革命に対する見方を示すと共に、その距離をも明らかにすることなのだと感じた。私が大学で中国語を学び始めたのは1979年、文革の影響を色濃く反映している教材で学んだ。文革についてはほとんど何も知らなかった私が強く文革を意識したのは老舎の作品を読み、作家老舎のことを調べ始めてからのことだろうと思う。老舎の最後について最初に知ったときには、自殺なんて嘘に決まっている、紅衛兵に殺されたのにそう公表できないだけだと思った。そしてこの本を読むつい最近までこの気持ちに大きな変化はなかった。傅光明は老舎の自殺の原因をどう見るか「抗争である」「絶望した」「耐えることができなかった」の大きく三つに分類しているが、これら多くの関係者の証言に触れていくうちに、自殺も決して否定できるものではないという気持ちになっていた。

これ以上のものはもう出版されることはないだろうと思っていたところ、杉本達夫先生から第2弾が出版されたという情報をいただいた。今回は現物を手に入れることができなかったので、この文章を書くにあたって杉本先生から本を拝借した。

今度は著者が二人の共著になっている。傅光明氏は良き伴侶を得たようである。発行は2001年7月、海天出版社という深圳の出版社から出版されている。序文にあたる「歴史・圈套・真実的神跡」のなかで、「1999年老舎生誕百年祭の時に、傅光明は“親歴”と“反思”二部からなる『老舎的死—— 采訪実録』を出版した。当時探し当てることのできた関係者の教に

は限界があったため、“親歴”は少々不十分で空白部分を残したままとなった。今回、この本を出版してから継続して補った取材を“親歴”の部分に加えて再構成し、老舎の自殺とそれに関連する事柄をさらに詳細に明らかにした」と述べている。前著が出版されてからも粘り強い取材を続けていたことに著者の執念のようなものを感じた。そしてそれはこの本に見事に結実している。今回は「家族の回憶」「老舎が生前所属していた職場である北京市文聯および文化局にいた関係者の回憶」「この事件と関連するそのほかの関係者の回憶」の三部構成になっている。構成のしかたを見ても、より事実を明らかにしたいという著者の意図が現れている。

前著ではインタビューのみがそのまま掲載されているだけだったが、今回はインタビューの前や途中、あるいは最後に、その人にインタビューをすることになったきっかけや後日談についてコメントが入っている。これは前著を読んでいない人にも、また読んだ人にとっても状況を把握するための非常にありがたい助けとなっている。

本の中に登場する顔ぶれも付録の資料も前作以上に多彩なものになっている。

中でも圧巻なのは、蕭軍関係のものと侯文正関係のものであろう。330頁のうち、蕭軍が30頁、侯文正が45頁、合わせると全体の2割を超える分量を占めている。

侯文正の項目では、「侯文正同志の“文革”初期の北京市文化局における関連問題調査状況に関する報告」、「“文革”初期、北京市文連における私のいくつかの状況について」、「私のいくつかの弁明」、「私の弁明の手紙」、「いくつかの回憶文の比較」、「私の考え方」という6編に及ぶ付録が収録されている。ここでは侯文正へのインタビューの後のコメントに、山西省が侯文正を調査したときに、侯文正が孔子廟で老



舎を批判する指揮を取っていたと証言した張阿濤という人物が、著者の取材に対しそんな証言を行ったことはないと言い、そしてそれ以上何も話したくない様子を見せたことが書かれている。老舎の死の周辺に関する問題が一筋縄ではいかないという、事情の複雑さが浮き彫りになっている。そしてこれは老舎の死に関係することだけではなく、文革で起こった事件について調査すれば調査するほど、これと同じような事例が出てくるのであろう。いったい、どれだけの人が嘘の証言で冤罪を被っているのだろうか。暗澹たる思いにとらわれる。

蕭軍の項目では付録として、「文革」中、蕭軍が中共中央指導部に送った手紙と「文革」中「専政組」が蕭軍に命令して書かせた《私の再調査と自己批判》が収められている。これは直接老舎の死とつながるものではないが、当時の様子を知りうる貴重な資料となっている。ほかにも宋海波の項目でも、直接老舎の死とは関係のない、八・二三前後に起こったサーカス団における動物殺害事件関係者の資料などが収められている。しかしこれらの資料が収められることによって、この本は前書に比べて老舎の死ひとつにとどまらない「文革とはいったい何であったのか」「文革でいったい何が起こったのか」を問ひかける内容のものとなっている。

著者にとって当時の関係者を捜し出すことは容易なことではなかったことは想像がつく。二人の著者の熱意とねばり強さがなければこれだけのものはできなかったであろう。最後に出てくる匿名の「彼女」は文聯にやってきた紅衛兵の一人である。まさか見つかるとは思ってもよらなかったし、見つかったとしても決して取材に応じることはないだろうと思っていた。彼女にとって当時のことを語るのは並大抵のことではなかっただろう。彼女の勇氣に感謝したい。

またコメントを見ていると、この二人を力強

く応援した人々の存在も見えてくる。その応援によって探しあてられたのが、老舎の死体を引き上げる作業の現場に立ち会った太平庄派出所の民警・郝希如である。さらに二人の執念が招き寄せたとしか言いようのない偶然によって見つかった関係者もいる。当時小学生だったタクシー運転手・盛占利である。傅光明が前作『老舎的死—— 采訪実録』を知り合いに届けに行った帰りにタクシーに乗ったところ、車が積水潭のそばを通りかかったとき、その運転手が突然ため息をついて作家老舎の死について語り始めたというのだ。よくよく聞いてみると彼は当時太平湖のそばに住んでいて、老舎の死体を引き上げる作業を目撃していたのだ。そして数日後、インタビューは実現したのであった。すでに四十年近くも前の出来事である。これだけたくさん関係者の証言がとれたのは、彼らにとって運も味方したと言うべきであろう。しかし逆にその年月が災いし、証言者がすでに亡くなっていたり、入院していたり、痴呆症のためにインタビューが実現できなかった例もある。もう数年遅ければこの本は完成を見なかったかも知れない。昨日のこともはっきり思い出せない私にとってみれば、取材を受けた人々の記憶力にただただ感心するしかない。どれほど衝撃的な事件であったにしろ、そのとき誰がいて何を言い何をしたかなど、私にはなにひとつ正確に証言することはできそうもない。

前作も含めてこの本が優れていると思われるのは、著者二人が老舎の作品を愛し作家を尊敬しているにもかかわらず、ニュートラルな立場に立って取材していることである。老舎の家族あるいは老舎が好きな人にとっては眉をしかめるような不快な思いをするようなものも、証言者同士の齟齬も、どちらの見方に立つのもなく、きちんと収録されている。だからこそこの本の資料的価値、歴史的価値はより一層高まっている。

『太平湖的記憶 — 老舎の死』そして前作『老舎的死 — 采訪実録』この2冊は、老舎研究者にとって必携の書であることは間違いない。そしてこの2冊から厳選したものの翻訳に、日本の老舎関係者・研究者への老舎の死に関するコメントを合わせて本にするというは、老舎研究会が一丸となって取り組むのにもふさわしい企画であると思うのだが。如何でしょうか？

## 『老舎と二十世紀』について

(書評)

渡辺 武秀

老舎生誕百周年国際学術討論会が1999年2月3日から6日まで北京で行われたことはまだ記憶に新しいところであろう。この『老舎と二十世紀』という本は基本的にはこの会での報告者の「論文」を収録したものである。選択の基準について編者は「あとがき」で「理論性、先進性、独創的見解、新発見新見解」を挙げている。なお、この時の国際討論会における発表者、発表題目、提出論文、さらに老舎生誕百周年に関連する行事についてはすでに『老舎研究会会報第13号』及び杉野元子氏の「老舎生誕一〇〇周年関連行事について」(『月刊中国図書』4月号・内山書店・1999)に詳しく紹介されている。

この『老舎と二十世紀』には全部で四十一人の老舎研究者の「論文」が掲載されている。これは恐らく編者が現在の老舎研究の多種多様さを示そうとしたためであろうが、この点では成功している。

さてこれから少し中身について論じてみたい。ただここに掲載されている「論文」のそれぞれについてコメントすることは、紙幅に制限もあり、ほぼ不可能である。したがって、それ

ぞれの論文名などについては冒頭に紹介した文献を見て頂くこととし、ここでは、僭越を承知で、この書物を読んで筆者が興味を持った部分を一つ二つだけ書くことにしたい。

### (1) 老舎の発言をどう取るか

老舎作品研究で悩まされることがある。それは、老舎本人の発言、例えば創作体験集などと、我々が作品そのものから受ける印象との違いである。老舎はしばしば自分の作品をいくらか否定的に述べる傾向があると思われる。だから、おかしな話だが、文革中の文章に極端な形として見られたように、老舎を攻撃したり、作品を低く評価しようとするれば、老舎自身の発言を引用して論を立てれば、その目的を達することができるのである。一般的には、作者自身の発言なのだから疑問の余地はないとされるが、老舎の作品研究の場合、どうもこれが必ずしも当てはまらないようである。

この点について、例えば、

- ① 中国の範亦豪氏と曾広燦氏は「談老舎創作的哲理蘊涵」で「作者の解説は決して定論ではない」(p.42)と述べているし、
- ② ドイツの凱蕾氏は「試論老舎作品中的女性描写」で、老舎は自分の創作体験談に「女性を描くのは苦手だ」と書いているが、この言葉こそが「女性描写」研究の大きな障害になっていると述べている (p.212)。
- ③ 中国の成梅氏は「老舎短篇比較研究」で『黑白李』は老舎がディケンズの『二都物語』の作品構成を取り入れていること等を明らかにしている(p.261)。このことは、成梅氏も述べているように、実は老舎は「私ほどのように短篇小説を書いたか」という文章で一言も触れていないのである。
- ④ 創作体験談ではないが、日本の山口守氏は「『四世同堂』英訳本的完成与浦愛徳」で、老舎の手紙中に見える『四世同堂』の訳者

としての浦愛徳に対する老舎の評価と、実際の浦愛徳との違いを、出来上がった訳文等から明らかにしている。

これらはみな、作者が言っているから正しいとは言い切れない部分である。

老舎作品を考える場合、むしろ研究者自らが作品から感じ取ったものを大事に追い続ける方が、却って作品の中に老舎の真の姿を見いだすことができるのだと、時には思い切る必要があるのではないか。

## (2) 個々の作品解釈を議論しよう

次に、作品を論者と違う角度で「読む」こともできるのではないかと思う用例を少し挙げてみたい。

- ① 『老字号』『断魂槍』は筆者の好きな作品であるが、この『老舎与二十世紀』にもこれらを論じたものが幾つか掲載されている。幾つかのうち、例えばすでに挙げた「談老舎創作的哲理蘊涵」に「(老舎の)辛徳治に対する風刺は鋭いが…」(P.46)とか「孫老舎は…(略)…また愛好者で武術狂いであるので」(p.48)といった言葉が出てくることがある。範亦豪氏等は作者が辛徳治や孫老舎といった人物を批判的に描いていると「読ん」でいるようなのだが、このように「読ん」でしまうと作品の背後にある作者のメッセージが見えてこないのではないか。やはりこれらの作品は「民間に生まれ長い時間の中で洗練されたもの」を「是」とする時に出現する「悲劇」的世界を描き出していると考えたい。
- ② 『小坡的生日』も筆者が気にしている作品であるが、この作品に、小坡という登場人物を中心に、中国人、インド人、マレー人といった各人種が仲良く遊ぶ子供の世界が描かれ、後半ではこれらの子供たちが友人を救い出すため不思議な生き物と戦う

場面がある。これをシンガポールの王潤華氏は「老舎が言う民族が連合して植民地主義に反対することを暗示する寓言である」(p.185)と解釈する。この作品は、「植民地主義に反対する」というより、寧ろ、シンガポールを舞台に繰り広げられる子供たちの「夢」の世界、ユートピアを描き出そうとしているという方向で「読む」こともできるのではないか。この角度からは、王潤華氏の考えるものとは別の老舎の主張が見えてくるように思われる。

- ③ 王端氏の「關於旧体詩与老舎の白話文」に、老舎が1965年の訪日のときに読んだ詩で《奈良三笠山》と題した「阿部当年思奈良、至今三笠草微黄、郷情莫問天辺月、自有桜花勝洛陽」についての解釈がある。氏はこの詩を「文言の助けも用いず、典故も用いず、決まり切った言葉も使わず、難しい言葉も使わず…」(p.429)と述べるが、実はこの詩は阿倍仲麻呂の「天の原ふりさけみれば春日なる、三笠の山にいでし月かも」が「典故」になっており、老舎はこれを踏まえてややユーモラスに表現していると理解すべきではないか。

## (3) 編集への疑問

最後にこの本の編集に対する疑問を挙げる。

- ① 「あとがき」を読んで吃驚した。ここに掲載されている幾つかの論文の一部分が著者に連絡することなくカットしていると書かれていたからである (p.501)。編者がどの著者と連絡を取ったのかわからないので、編者のカットが適切かどうかを今述べることはできないが、実際幾つか調べてみると、確かにそのような箇所があった。
- ② また、ここに収められた「論文」の中にはすでに他の雑誌などに掲載されたものがある。個人の全集のようなものならともか

く、もし「論文集」とするならば、このような転載はすべきではないのではないか。しかも転載する際に必要な「初出雑誌の紹介」がない。

- ③ さらに、報告の中には、引用文を使いながら、出典が明記されていないものがあった。これなどは、やはり、もう一度著者に連絡して、きちんと書いて頂く必要があったと思う。
- ④ またさらに、簡単な要約だけを掲載しているものがある。なぜ著者にもう一度完全な形の論文を求めることをしなかったのだろうか。

ともあれ、編者も述べているように、この『老舎と二十世紀』は二十世紀の老舎研究の総括とも取られるものである。だとすれば、なおさら老舎研究の深化のためにも、各著者の名誉のためにも、読者のためにも、編集に時間はかかるとしても、それぞれの研究者としっかり連絡を取り合い、この本のための、この時期の、最高水準の原稿を依頼するべきではなかったか。このような本の必要性を強く感じるが故に、これらの点が惜しまれてならない。(完)

## 老舎関係文献略目 (5)

倉橋 幸彦

### 【2000年】

花城可祐訳「朴宰雨著「韓国における老舎研究と作品の翻訳」」

『二松學舎大学人文論叢』第64輯  
(3月25日) p.203-215

- \* 「韓国の老舎研究の状況については、これまで韓国外国語大学・朴宰雨教授の「韓国的中国新文学研究近十七年的情況簡析」(『中国

現代文学研究叢刊』一九九七年、第二期、作家出版社)等に、論文タイトルの紹介がなされたのみで、その内容については知り得ることはできなかった。／本編は、その朴宰雨教授が、去る一九九九年二月(二日から四日)に北京で開催された「老舎先生生誕百周年記念国際学術研究討論会」において発表された論文(その改訂稿)の翻訳であり、原題を「老舎研究与作品訳介在韩国」(中文)と言う。本篇によって韓国における老舎研究の歴史と現状を了解することができよう。」

武永尚子「《四世同堂》における日本人像」

『二松學舎大学東洋学研究所集刊』  
第30集(3月31日) p.(1)-(26)  
p.137-162

- \* 「この論文は1987年7月24日に早稲田大学で開催された老舎研究会で口頭発表したものを文章化し加筆したものである。」

杜 広沛「『茶館』の運命」

『人民中国』4月号(4月5日、人民中国雑誌社)「20世紀 写真と証言でたどる中国の100年<sup>⑩</sup> 舞台」  
p.76

- \* 「私は美術担当で人芸に入ったんだけど、子どもの頃から芝居が大好きだったので、ちよくちよく脇役で舞台に立たせてもらったよ。五八年頃、初めて老舎の『茶館』を舞台化した時も、美術の責任者として大道具の設計を担当しながら、巡査の役も演じた。出番は第二幕。名優于是之氏の演じる主人公掌櫃の茶館にやってきて食料を徴収する役で、せりふは短かった。リハーサルの時、老舎先生も現場にいて、台本のせりふを読みあげて役者に手本を示してくれていた。ある日、先生が「巡査役のせりふを少し変えた」と、わざわざ伝えに来てくれたのを覚えているよ。」

勝美洋一「老舎の最期」

『中国料理の迷宮』〔講談社現代新書 1502〕（5月20日）p.202-204

\* 「羊肉の東来順は第二十五中学、第二十六中学、第六十三中学の紅衛兵によって、屋号の額や、店内にあったさまざまな扁額が壊された。「老店新風」の老舎の書は、伝統を否定する紅衛兵たちの格好の餌食となり、ばらばらに破られ踏み潰された。……この第六十三中学の紅衛兵は最も凶暴だった。二十三日の昼の国士監（清代の科挙の試験場）で、文化局の所蔵品である京劇の衣装などを燃やし、作家の老舎などを連れてきて跪かせ、殴る蹴るの暴行を働いた。その中で血まみれの頭のまま老舎だけが最後に自分の首にかけられた罪状の「反動的文艺権威」をひきちぎり、紅衛兵たちに投げた。その結果、虐待は深夜に及び、／「いったん家に帰り、明日、遺書を書いて持って来い」／と言い渡された。中国では自殺は反革命的行為だった。／「またここに戻って来るのかね」／と老舎は言ったという。／「太平湖なら行ってもいいが」／「必ず来い。遺書を持って来るんだぞ。自分の著作すべてが間違いだったことに気づき、絶望したと書け」／それを私の友人は傍らで聞いていたという。」

李 慶国「老舎の心の原風景 — 北京の中国近現代文学地図(1) — 」

『アジア観光学年報』（追手門学院大学文学部アジア文化学科）創刊号（6月）p.103-110

\* 未見

石井英夫「産経抄」

『産経新聞（朝刊）』（6月10日）

\* 「文革で自殺した作家・老舎が内蒙古をたまためた詩の一節に「処々の泉林 見てあきるこ

となく 緑城おもむろに緑の林に入る」というのがあった。中国の“草洋”経済開発が、遅ればせながら環境保護に転換するというニュースはほっとさせる。」

渡邊武秀「老舎「幽默作品」中の「悲劇」考」  
〔東北大学名誉教授）村上哲見先生  
古稀記念論文集刊行委員会編『中國文人の思考と表現』（7月18日、汲古書院）p.287-304

\* 「本稿は一九九九年七月二十三日早稲田大学文学部で行われた「老舎研究会」で口頭発表したものに加筆・訂正を加えたものである。」

『老舎研究会会報』第14号（7月21日）

▲藤井栄三郎「『老舎文学詞典』を読んで」p.1-3／杉本達夫「死から浮かび上がるもろもろの事 傅光明編『老舎之死採訪実録』について」p.3-4／布施直子「英語訳『丁』について」p.4-5／杉野元子「世紀末中国における老舎」p.5-6／門田康宏「老舎の短篇小説」p.6-7／倉橋幸彦「老舎関係文献目録(3)」p.7-10／平松圭子「趙清閣女子逝く」p.10-11／〈事務局だより）p.11

沈延太・王長青（文／写真）

「老舎研究会」北京胡同の旅」

『人民中国』8月号（8月5日、人民中国雑誌社）p.36-39

\* 「八十歳を越えた中山時子団長にとってもまた様々な思いがあったことだろう。中山先生は何度も北京を訪問し、北京の胡同、四合院、そこの一草一木にも無限の情を寄せている。ところどころ欠けた門？（門の装飾と扉をささえる役目を兼ねた石）、雨よけのひさしに掛けてある鳥カゴ、庭の古いナツメの木……これらすべては、彼女にかつての北京での日々、そして老舎作品のなかの様々な情景を思い起

こさせ、感動的な物語の数々を紡がせる。中山先生は、私たちに劣らず、北京の古い胡同、四合院に恋しているようだ。」

林 望「水澄んで変わるもの【匂い立つ北京  
④ 水辺】」 『人民中国』11月  
号 (11月5日) p.40-41

\*龍鬚溝探訪記

(蛇足) リンボウ先生こと林望とは同姓同名ながら別人。

【2001年】〈上半期〉

杉本達夫「老舎が残した未完の長篇 創作を加え上海で初上演」

『朝日新聞(東京)夕刊』(1月19日)(9)〈海外文化 中国〉

\*張桂興『老舎年譜』・『老舎資料考釈』・『老舎旧体詩輯注』等の「仕事」にも言及。

陳 真「北京放送入局のころ」

『柳絮降る北京より — マイクとともに歩んだ半世紀』(1月30日、東方書店)第一部 北京の街をラクダがゆく p.3-4

\*「わたしが北京放送局に入局したのは一九四九年、昭和でいえば二十四年、北京が解放を迎えた年であった。／厚い城壁をめぐらした古都北京は、当時北平と呼ばれていた。解放されたとはいえ、町はまだ至るところに荒廃の痕を残していた。／人力車や馬車にまじって、ラクダが町中の通りをのたりのたりと歩いていた。その悠揚迫らざる歩きかたには、のたりという擬態語がピッタリだったので、五十余年たった今でも、のたりのたりという、わたしの目の前には、おだやかな春の海よりも、見あげるように大きいラクダが浮かんでくる。幼いころラクダはおとぎ話の中の

存在だった。金と銀の鞍を置き、王子さまと王女さまを乗せて月の砂漠をトボトボと行く — 童謡の歌詞とメロディーが植えつけたロマンチックな印象を一変させたのは、香港でくりかえし読んだ老舎の『駱駝の祥子』だった。だが、まさか祥子の世界のラクダが、現実の北京の町を歩いているとは思ってもよらなかった。ラクダを引いている農民も、煮しめたような布で頭を巻き、つぎの当たった服を着ていた。」

谷口知子訳「ほかほかの肉まん」

『藍・BLUE』2001年第1(総第2)期(2月14日) p.337-342

\*「本翻訳は、老舎1985年5月北京「熱包子」『老舎文集』(第八巻)：人民文学出版社による。」

燕子訳「舒乙「最後の食糧配給切符」」

『藍・BLUE』2001年第1(総第2)期(2月14日) p.343-347

\*「50年代初め、老舎氏は映画の脚本を一つ書いたことがある。タイトルは『人同此心』で、中学校教師歩春生の家族をモデルにして、知識人の思想改造を描いている。この脚本の提案は毛主席本人である。彼は歩春生が『人民日報』で発表した「我が家の二年來の変化」を読み、知識人の共産党に対する認識過程の真実性を反映していてとても良く、そして、もし映画の脚本ができたならば、さらに多くの人々を教育できると思った。周総理は映画局の袁牧之、陳波児と相談し、『龍鬚溝』を書き下ろした老舎氏がこの任務を担当することに決定した。脚本はできた。しかし、映画局に勤めていた江青の一言で行き詰まった。彼女は「老舎本人はまだ改造されていないブルジョア知識人なのに、どうして知識人の改造を書くことができるのか?」と言った。／

12、3年後、江青はとうとう老舎氏が実際にブルジョア知識人であるとする根拠を見つけた：毎朝必ずゆで卵を一個食べる。」

\* 舒乙「最後の食糧配給切符」は、『郷土』2000年第8期より。

日下恒夫「二〇〇〇年読書アンケート（第三回）」『中国図書』第13巻第3号（3月1日、内山書店）p.10

\* 『老舎文学詞典』、『老舎之死探訪実録』を取り上げる。

高橋由利子「北京缸瓦市教会と宝広林 — 老舎の関わった教会のその後 —」  
『お茶の水女子大学中国文学会報』  
第20号、〔佐藤保先生 退官記念号〕  
（4月）p.101-116

\* 「本稿は2000年10月20日、北京語言文化大学で開かれた老舎シンポジウム（老舎と二十世紀中国文学研究会）での口頭発表をまとめたものである。」

田所竹彦「老舎〔20世紀中国を創った人々 第3回〕『中国語』第497号（5月15日、内山書店）p.65

\* カット：「一九六五年、ホテルニュージャパンで語る老舎」

藤野彰「文化大革命 死選んだ国民作家」読売新聞20世紀取材班編『20世紀革命』〔中公文庫〕（6月25日、中央公論新社）P.232-235

\* 初出は『老舎関係文献略目(4)』参照

飯倉照平「中国研究会と竹内好」  
小島晋治・大里浩秋・並木頼寿編『20世紀の中国研究 その遺産をどう生かすか』（6月30日、研文出版）

〈第一部 中国研究・中国認識の足跡〉P.209-225

\* 「丸山さんの文章〔☆「竹内日記を読む」（『丸山真男集第12巻』所収）〕の中で、いま話したことには直接関係ないかもしれませんが、竹内さんが戦後の日記のなかで、老舎の『四世同堂』を読んで、「空疎な観念的描写」で、老舎は「戦争下の北京の生活を体験していないらしい」というようなことを、日記に書いていることを指摘しています。たしかに、老舎は北京にいないで、この『四世同堂』を書いたわけですから。丸山さんは、竹内さんの『四世同堂』についての感想を、戦争の始まった時点の北京にいた人にしか分からない批判だというふうに言ってるわけですね。竹内さんが戦時下の北京で感じたことの間接的な表現だということです。これは、ちょっと面白いと思いました。」

## 老舎研究会会報

### 第15号（2001年7月）掲載目録

胡絮青先生を追悼して 杉本 達夫  
老舎夫人胡絮青女士を偲んで

中山 時子・平松 圭子  
北京の都市研究を通して老舎作品を読む

大辻富実佳

松島を詠じた老舎 花城 可裕

古書市の老舎のことなど 杉本 達夫

老舎を読む会の4年半 稲田 直樹

『老舎之死探訪実録』を読んで 杉野 元子

史承鈞主编《简明老舎词典》 高橋由利子

膨大と細心の「老張的治学」

張桂興《老舎研究叢書》を吹聴する

日下 恒夫

老舎関係文献目録 (4)

【1996年補、1997年補、1998年、1999年】

倉橋 幸彦

事務局便り

## 事務局便り

◇2001年度大会は7月27日〔金〕に、早稲田大学で開催されました。発表者とテーマは次の通りです。

大辻富実佳：甘海嵐女士の京味儿について

谷口 知子：『茶館』における要請表現

倉橋 幸彦：『老舎全集』との薄い関わり

杉本 達夫：老舎の死をめぐる断想

◇2001年度大会報告でもお伝えしましたが、故柴垣芳太郎会員の蔵書が龍谷大学に寄贈され、『柴垣文庫目録』が刊行されました。また夫人の柴垣輝子会員のご好意により、目録数十冊が会員諸氏に寄贈されました。

◇老舎研究会会報も今号で16号を数えるまでになりましたが、事務局としてはこれまでバックナンバーを保存してきておりませんでした。バックナンバーを入手したい、或いは閲覧できないかという問い合わせにも、応え

られない状況にあります。会員の方で、古いバックナンバーをお持ちの方は、コピーさせていただきたいと考えておりますので、是非ご一報下さい。

◇以下の会員の方の現住所が不明となっております。ご存じの方は、お手数ですが、事務局までご連絡下さい。

中野麻里子会員

◇住所や所属を変更された方は、お手数ですが事務局までご一報下さい。

◇老舎や老舎の作品に関連するエッセイ、論文、書評など、会員各位の投稿をお待ちしています。奮ってご投稿下さい。

◇今号の編集についても、執筆者各位にご無理をお願いしました。印刷をお願いした好文出版には、心より感謝申し上げます。

老舎研究会会報第16号(2002年7月26日)

〒162-8644 東京都新宿区戸山1-24-1

早稲田大学文学部2407(高屋)研究室内

老舎研究会事務局

TEL: 03-5286-3702 (中国文学専修室)

FAX: 03-3203-7718 (文学部代表)